

## 平成29年度 第2回学校評議員懇談会（兼SGH評価委員会）議事録

1. 期 日 平成30年2月2日（金）
2. 時 間 15:30～17:00
3. 会 場 長野高等学校大会議室
4. 出席者 学校評議員6名

竹前紀樹氏（朝日ながの病院長）、中村正行氏（信州大学工学部教授）、南波克彦氏（上松区長）、藤井純子氏（東口メンタルクリニック臨床心理士）、松本 清氏（長野運送株式会社社長）、森山奈々氏（長野市PTA連合会副会長）【アイウエオ順】

学校職員11名

5. 懇談会内容（司会：小川・山崎 記録：永井・岸田）

- (1) 学校長より：各学年と定時制の報告、国の教育改革と県内の高校改革などについて説明。
- (2) 自己紹介
- (3) 意見交換

### ①SGH事業の成果と今後のあり方

- 白鳥SGH係長：今年度の事業改善をはかった点とその成果・課題について、折々のビデオ映像を紹介しながら報告。
- 小川教頭：SGH指定期間終了後（平成31年度以降）の本校教育課程についての検討経過を報告。

### ○SGH事業の今後のあり方についてのアドバイス

- ・中村委員：現在、その意義が重視されるようになってきたPBL（プロジェクト学習）を長野高校が率先して進め、その方法論を先生方が研究してきたと認識している。11月に仕事で北陸3県の高校をまわってきたが、どの高校も英語4技能の民間試験への対応をかなり進めているように感じた。GTECに対するトレーニングを重ねていく高校が多いようだ。長野高校ではどう考えているのかを伺いたい。いずれにせよ、この学習の仕方を重ねていくと、成長できるというプロセスを生徒に示せることが大切であろう。大学はTOEICを利用することが多いのだが、学生たちの英語力が向上していくプロセスを示して、モチベーションをあげている。以前は大学でAL（アクティブラーニング）の授業を行うと、「先生は教えてくれない」と不満を言う学生が多かったが、今はもう学生たちが当たり前で自分たちでALを進めている。それだけALが一般的になってきたのだろう。
- 小川教頭：本校でもGTECを採用していくが、他校と違うのは、発信型の英語力をただの訓練ではなく、学ぶ意義の実感とともに実践的に学べるカリキュラムを開発しているところだ。
- ・竹前委員：善光寺グローバルサミットで卒業生がビデオレターで登場するなどして、ロールモデルを在校生に示しているのがよい。サミットや課題研究発表会でも、会場の聴衆となっている生徒の表情がとてもよくなってきたと感ずる。また、発表するとき、発言するときのボソボソとした内気なししゃべり方も今はない。随分と変わったと感心する。
- ・森山委員：積極的に新しい学びを開拓している長野高校にあらためて感動した。ただし中学生を持つ親の立場から見ると、これだけの高度な教育（特に英語）に自分の子がついていけるのか、

心配にもなる。生徒の成長の軌跡のようなものを公開していただけないのではないか。

- ・藤井委員：SGHの学習プログラムについて、教員側からの「これだけの意義があるからこの学習をするのだ」という発信と、生徒側からの「この学びをしてこういう意義を感じた」という発信の相互の発言が展開されるとよいのではないか。特に英語の学習については、このように役に立ったという生徒側の実感を積み重ねていくことが大切だと思われる。

もうひとつは、米国リーダー研修でハーバード大学生と交流することにしても、東京大学に推薦で合格するにしても、それは長野高校の成績上位生ができることであって、そこに入れなかった生徒が挫折感をもつだけではまずい。それぞれの生徒にとって充実感を得られるような学習プログラムが望ましいと思う。

- ・松本委員：新しく出発する県立大学のグローバルマネジメント学科は長野高校のSGHの課題研究と相通ずるものを多くもっている。県立大学とどのような連携をはかっていくかも考えていただきたいと思う。地域の経済界としても県立大学に期待するところは大きい。

経営者の立場からこれからの地域の課題を考えると、短期・中期的展望のなかでは、人不足が大きな課題であり、中期・長期的展望のなかでは、AIの開発・応用が大きな課題である。長野高校は高校時代にそうしたテーマを生徒に考えさせているわけで、社会が大きく変わっていく転換点に生きているのだということに関心を向けさせている。これはとても大切なことだ。

- ・南波委員：上松区としても県立大学に寄せる期待は大きい。金田一学長をはじめとする多彩な教授陣が揃えられ、地域の諸行事ともかかわりながら自分たちの学びを進めようとしている。現在の長野県が進めている学びの改革とも一致する事柄が多いように思われる。

——原校長：県立大学の金田一学長と懇談し、今後の連携をはかっていきたいと思いますという話をしたところである。連携のあり方について研究を重ねていきたい。

## ②定時制の課題の中から

- 岸田教務主任：定時制生徒の現状とキャリア教育の課題について説明。

## ○定時制キャリア教育の充実に対するコメント

- ・中村委員：就労体験後に発表の場を設けることが大事である。そこに行っていない生徒が疑似体験できる以上に、体験したことを人前で発表するということは、様々な力をつけることになる。また、職場だけでなく大学を見学する機会も設けるようなことはどうだろうか。
- ・藤井委員：ケースワーカーがやっているようなことを学校でも丁寧に取り組まれていると思う。
- ・竹前委員：病院では介護士が不足している。希望する生徒はいないか。生徒に情報提供してほしい。

## (4) 学校長より御礼の挨拶